

2022年8月

瓢鮎抄（一六四） 尾池和夫

なぜに富士の周りのみなる夏の雲  
機内誌に古希の特集氷水  
牧草刈る一直線の乱れなく  
密集のビート畑や炎天下  
プラットホーム桑の実へ手を伸ばし  
二歳馬の出走待たれ夏の雲  
熱砂蹴る疲れや鞭曳競馬果つ  
砂煙あげたる数の馬冷す

落葉松の防風林も真夏日に  
十勝岳へ畝まつすぐや大豆植う  
農場主五代目なりとハンモック  
馬鈴薯の花やこの地は薯とのみ  
蝶鮫の水槽生まれ日の盛  
鹿追の地名アイヌ語夕焼雲  
山火事のありし繁りや夏の雨  
搾乳の牛行儀よき夏盛ん  
炎天や乳牛はいま昼休  
遠雷の鐘の鳴る丘ラベンダー

2022年7月

瓢鮎抄（一六三） 尾池和夫

新緑のほどよく揺るる窓の外  
ジャスミンの花絡みつく裏鬼門  
新緑は桂の重ね軽井沢  
葉桜の小さき葉を選り吹き鳴らす  
母の日や親子の気質似て非なる  
新幹線はこの山中ぞ藤の花  
老鶯のこゑを待ちをり夜の明くる  
薩埵峠見上ぐるのみに夏の空

国境無き太古に戻れ雨蛙  
我が余命幾ばくなりや竹の花

つぶやきは本音にあらず若葉風  
再生医科学研究所前松の芯  
木苺の広がり止るすべのなく  
富士川も富士も隠して梅雨滂沱  
梅雨激しハイビスカスは花を閉ぢ  
大声の酒屋のあるじ梅雨滂沱  
花崗岩の巨石五輪や苔の花  
小國社の神木蚊母樹の花と

2022年6月

瓢鮎抄（一六二） 尾池和夫

茶畑へ続く山なみ霞みけり  
桜蝦由比の浜いま朝日和  
蒲原のここだくの漁桜蝦  
春風や御位牌天武天皇と  
真上より見れば猫の眼草と知り  
米蔵の鼠返しよ春の塵  
田起しもすべて人力登呂遺跡  
藁屋根へ白詰草の割込みぬ

「子育て中」と床に貼紙燕の巢  
たちまちに諸手ふさがる蕨かな  
仏前に濃き緑なす高野槇  
横長の田下駄に身動きのならず  
復元の火鑽白なり初夏の風  
葉桜や疏水に小さき渦多し  
葉桜や高野町内高野山  
五月闇織田家に並ぶ豊臣家  
風に揺るる舞妓の帯や薄暑光  
六月や晴れて舞妓になられしと

2022年5月

瓢鮎抄（一六一） 尾池和夫

小学校跡に根付きぬ花大根  
黒文字の花や小雨の愛宕道

清水港見おろす寺や牡丹の芽  
六地藏尊は海向き擬宝珠の芽  
跨線橋沿ひに木通の花盛り  
清見関跡の地かつて海や春  
戦争はすべて虚となれ春の海  
暁の夢に屋根打つ春の雨  
桜咲くかつて焼土の駿府にも  
花屑をていねいに掃き出勤す  
交番の裏へまはりし花筏  
桜井戸や名残の桜散り急ぐ  
静岡へ発つとき京の黄砂濃し  
晩春の朝逆光の近江富士  
愛知川を渡り車窓の麦の秋  
暁暗の近江平野よ麦の秋  
はやばやと濃尾平野に初夏の風  
新緑の駿河の朝に下り立ちぬ

2022年04月

瓢鮎抄（一六〇） 尾池和夫

露の臺かつて坑夫の歩きたる  
伝承のマタギの径や露の臺  
谷筋を描き出したたり春の雪  
春の草春の浅瀬を流れ行く  
水音に水を重ねて山葵沢  
去り際の未練をことに蕨採  
春筍や完なき源氏物語  
投げ釣の狙ひ眼張にさだめたり

山菜萸の花影もまた黄のありぬ  
蒲公英の道たどりゆき忍野村  
うららかや忍野八海よりの富士  
国道より富士の見えある梅真白  
富士山をくるむがごとし春の雲  
富士見橋に富士の見えざる霞かな  
独りなる朝もまたよし春の雪  
多様性とは水仙の花の向き  
信長公廟の白梅三分咲き

足休ますと止り木に春の宵

2022年03月

瓢鮎抄（一五九） 尾池和夫

石垣の石の遊びに春兆す  
梅が香やビルの谷間の昼休み  
春風や京に西山東山  
明日あると思へど遅寝二月尽  
大文字山の大的字春めける  
片隅の一輪挿しの黄水仙  
教会の鐘かすかなり朝寝中  
春光やキリシタン墓碑一列に

啓蟄や聖母子十五玄義の凶  
静かすぎるよ啓蟄の朝の雨  
春の塵払ふ額装マリアの凶  
草餅の旗はたはたと栗田口  
枝振りの相あきらかに春の雪  
三井寺より湖面の見ゆる春の月  
玉三郎昆劇を舞ふ木の芽時  
俄雨たちまち目立つ柳の芽  
青空がいちばん似合ふ土佐水木  
霾るや楼蘭のこと論文に

2022年02月

瓢鮎抄（一五八） 尾池和夫

雲重く彦根は雪の深き町  
雪雲の切れ飛ぶ養老断層へ  
新年の日矢のまつすぐ港町  
比良山に雪雲の乗る二日かな  
貝殻の絵馬奉納の三日かな  
冬空へ威風立ちなり硯石  
里山を隠す吹雪となりにけり  
冬の空上げ空師の着地かな

氏神のかつての記憶冬紅葉  
新海苔や海の生物多様性  
奥山は我が水源よ落葉踏む  
薬草と看板大き冬の邑  
本堂へ郵便配達冬紅葉  
切株に立ち上がりたる冬椿  
人はみな赤子たりしと鯨汁  
研究会納や猪の鍋の湯気  
孤立なる富士は堂々冬景色  
浚渫の琵琶湖疏水に寒鴉

2022年01月号

瓢鮎抄（一五七） 尾池和夫

戻り鯉炎の位置が決め手なり  
一里塚集合の子ら榎の実  
香りほのと桂落葉のあたりかな  
遠目する富士に雪なし十二月  
名誉教授称号授け小春かな  
橡の実や巨木に挑む樵の背  
伐り活かす木樵の斧や小春風  
小春日や年輪叩き木樵笑む

こゑあげし鴨編隊の列くづす  
流れいま逆転したり冬の汐  
土佐言葉飛び交ひ七五三祝  
竜神を祀る池面へ散る銀杏  
道真のご神歌揃ひ石露の花  
落葉踏み幼きころの道たどる  
銀杏散る板垣退助生まれし地  
崩落の崖の上なる子守柿  
ジグザグに登りつめたる子守柿  
駅ごとに柿たわわなる土讃線